

# 東日本大震災とその後の子どもたちを

## 支えている人たちインタビュー

### 第10回（後編）

#### 子育て世代のいま

— 避難解除されて戻ってきた方々、特に地元の人で戻ってきた方々はもちろん事情があるので一概には言えないと思うのですが、自分の地元で子育てをしたいとか、そこで生活したいとか生きていきたいというような想いは強いのでしょうか。

【小林】浪江町の場合は、多種多様な理由があるんですけども、ご自身の事業を元々持っていて浪江町で事業再開したいという方が戻って来られて、その中でもご結婚されていた方はこどもが小学校にあがるタイミングで戻ろう、というご家庭もいます。私は典型例ですけど、浪江町出身の方と結婚したので浪江町に行きます、という形でした。避難先に留まるか浪江町に戻るかでいろいろお話をした上で離婚されて戻ってきた方、子連れで戻ってきた方とか、いろいろいらっしゃいます。

【鈴木】浪江町は本当にいろいろな方がいますよね。富岡町は、消極的な理由で帰還されている方が多いということをや役場の方と意見交換する時にお話しています。消極的な理由というのは、避難先で馴染めなかったとか、帰ってくることで受けられる支援を求めて、などです。つまりは、その支援がないとなかなか生活自体が立ち行かないというご家庭が多いということです。新規転入の方たちはお仕事由来の方たちが多く、企業に勤められている方もいるんですが、仕事の特性上どうしても期間が定まった職場なので、経済的に不安定なご家庭も少なからずいらっしゃって、課題を抱えているご家庭が多いです。この話は就学前のお子さんがあるご家庭のことですが、今取っているアンケートの答えを見ると、7割ぐらいの方たちは小学校にあがるタイミングで町外に移りたいと答えていて、こどもたちをここで育てていくということについて、前向きになれていないご家庭が少なくないです。

— そうするとちょっと大雑把な話で恐縮ですけど、まだちょっと足元が定まっていないうか、いろんなところでまだまだぐらぐら揺れているような感じはあるんですかね。子育て世帯に関しては。

【鈴木】富岡町は特にあると思います。

【小林】これから解除になってこどもたちが帰ってくるであろう大熊町も、子育て世帯に向けたサービスや支援をこれから作っていくので、おそらく同じような現象が起こってくるんじゃないかなと予想しています。

〔日野〕 檜葉町は 200 人くらいの子どもたちがいて、年々増えてはいますが、その層がどういう人たちなのかっていうのは、私はあまり把握できていません。ただ、移住してきた人たちや元々住んでいた人たちに子どもが生まれて、子どもの中でも就学前の子どもたちが多いという状況です。富岡町ほどの特性は具体的にはないかなと思います。

〔鈴木〕 檜葉町は 7~8 割くらいが元々住んでいた人たちで、檜葉町で仕事をずっと続けていくという中で移住してきた方もいます。また、避難指示解除が遅かった、富岡町、大熊町、双葉町で暮らしていた、すこしでも双葉郡に帰りたいという方たちが、2015 年に檜葉町が避難指示解除されたときに檜葉町に戻ったというような現象があるので、檜葉町で住んでいく意志のあるご家庭が大半だと思います。

### 町ごとの状況

一 町ごとに全然違うというのは、震災前からそうだったのか、避難指示が解除されて帰ってくる過程でそうになっていったのでしょうか。

〔鈴木〕 こんなにも違うのかってすごくびっくりしています。

〔小林〕 聞いている話だと、双葉郡はそもそも南と北側で文化がけっこう違う、地域性が違うというのは歴史的にあるようです。あと大熊町、双葉町に関しては原発立地で、富岡町、檜葉町も第 2 があるので、それによる仕事はかなりあったそうです。富岡町は昔から双葉郡の中心で、県庁や行政の合同庁舎など公のものもありました。川内村、葛尾村はわりと山間部に位置しているんですけど、随分昔は東京とかまで出稼ぎに行かなくてはいけなかったのが、原発ができたことによって雇用が生まれたので、川内村にいても葛尾村にいてもそこで暮らせるようになった、と。浪江町は電源立地ではないので、雇用という意味では双葉町、大熊町ほどではないですけど、そこで働く方が利用する商業、飲食店などがかなり盛り上がっていた、という背景があります。浪江町は商業関係が多くあったので、解除になった後、最初は少なかったですけど、双葉郡の中でもかなり多い数の飲食店が復活してきています。震災前のなんとなくの地域ごとの文化は、残ったままかなと思います。

〔鈴木〕 子どもたちの状況もそういう背景にすごく左右されるんだなというのは、活動している中で一番の気づきであり難しさです。一年に一回、役場の保健師さんや福祉課の職員さんたちに今の町の子どもたちのことや課題をそれぞれ聞いていますが、富岡町はこういう課題があるね、檜葉町とは違うね、浪江町とは違うね、と、それぞれの違いにどう対処していくかというのは、少しずつ変えながらやらないといけない状況です。

一 行政の、特に直接子どもや乳幼児もしくはその母親と関わるような行政の部分と接触するチャンスは多いですか？

〔鈴木〕 比較的多いと思います。一年に一回必ずヒアリングをするほかに、サロン事業などをやる時には開催案内をご協力いただいたり、その場所に来ていただけるように私たちから働きかけたりしています。連携が一番よく現れているのが、富岡町でやっていることも食堂の事例です。ほかの町村との違いを見的过程中で、富岡町は地域の中で子どもたちの受け

皿となるような場所がもっと必要だという想いで、こども食堂を始めました。先ほど話したように福祉的な課題というか、専門的なサービスにつながらなくてはいけないご家庭が少なくないので、保健師さんに開催の呼びかけをしてもらって、当日も来てもらっています。民生委員さんにも当日一緒に参加していただいて、日常レベルで困りごとに寄り添ってもらえる人たちを増やしていくことをしてるので、行政の方たちも毎回のこども食堂に関心を寄せてくださっていて、参加されています。

## いまの課題

一 町村によっていろいろ課題が違うということはお話を伺いましたが、いろんな立場のこどもたちとこども食堂や冒険ひろばで直接接していて、双葉郡という大きな枠組みで考えた場合に、そのこどもたちを取り巻く環境の中での課題として挙げられることというのはどんなことですかね？

[小林] いろいろあると思いますけど、双葉郡内の子育てに関するリソースが少ない、選択肢が少ないということが、まずあります。こどもたちにとって、学校、進学先、習い事、家と学校以外の場所のこどもの居場所、コミュニティとなる場所など、何にしても本当に限られたものしかありません。その中で、こどもたちがどうやって機会を取りにいけたらいいのか、どう見つけてもらえたらいいのかというのは、保護者自身が積極的に機会を見つけていかなきゃいけないと考えている方もいるので、そういったことに関して悩まれている方はいると思います。例えば部活の場合、児童数が少人数だと集団的な競技のスポーツの部活はできないので、転校をしてその部活があるところに移り住むとか、そういうこともけっこうあります。こどものやりたいことを考えると、今の地域にいた方がいいのか、双葉郡外に行った方がいいのかということで悩んでいる方はいらっしゃいます。

[鈴木] 帰還しないことを選択した人たちの中でも、こどもたちの教育や育ちの上での選択肢が少ないことを帰還しない理由として挙げられる方はものすごく多いです。あとは、専門性のある資源、リソース、福祉サービスとかは本当に少ないと思っています。私のこどもは特別な配慮、支援が必要な状況なんですけど、双葉郡内では療育施設や放課後等デイサービスとかがないんですね。なので、近隣、と言っても、いわき市か南相馬市、どちらも片道一時間以上かかるところに行かないと支援は受けられない状況で、小学校には富岡町であげられますか？という話が私自身、現実になってきています。私は、ある意味ここでどこまでできるか挑戦していきたい気持ちでいるんですけど、そんな苦勞をしてまでここで暮らしていくことを選択しなくて済むのであれば、他地域に行かれる方もいらっしゃると思います。特性があるこどもたちでもここで子育てしていて健やかに育っていけるかということ、なかなか厳しい状況にあるかなと感じざるを得ないです。帰りたいけれども福祉施設がないので帰れないですっておっしゃる方もけっこうよく聞いていますし、逆に障害とか特性が判明して、どうしよう、町外に移ったほうがいいのかということを検討されている方のお話もよく聞きます。

## 地域との関わり

— 鈴木さんは、ここを出ようと思ったことはないんですか？

**[鈴木]** ないです、逆ですね。こどもが2歳半になるまではいわきに住んでいたんですけど、いわきにいた時は、すごく孤独だと思っていました。仕事のつながりはあるし、人口規模はいわきのほうが大きいのですが、すごく淋しくて、こんなに人とのつながりがないなんて耐えられないっていうふうに思っていました。いわきにいた時から富岡町の会社で仕事をしていたので、富岡町で暮らした方が日常的に関われる人たちの数はすごく多くて、関わりが多い方が自分にとってはすごく幸せだなって感じられるので、富岡町に引っ越しました。実際に来て、すごい変わりました。よかったなあって思いました。今のほうが暮らしやすいですし、不便だとも淋しいとも思うことはありません。いわきのほうが格段に便利ははずですけど。しかし、移住定住事業で子育て世帯に来てほしいと言われた時はなかなか、自慢できるポイントがないというか、ほかの地域と比べたら不便なことは明確かなと思うので、来てねってなかなか言えないです。なので、そういう中でもどうやったら子どもたちにとっていい環境を作れるとか、自分たちの暮らしが楽しくなっていくかみたいなのを工夫するのを楽しむ人たちとか、工夫のためにみんなとつながって知恵を出し合うことを楽しめる人たちだったら、この地域に来てもらえたらすごくおもしろく生活できますよ、みたいなことをよく伝えていきます。

— このあたりは外から入ってくる人に対しての拒絶感みたいなものは元からあまりないですか？

**[小林]** 元からかどうかはちょっとわからないですが、比較的ほかの、よくある田舎と比べると、かなり寛容だなと思います。ウェルカム感があります。

**[鈴木]** 電力関係のお仕事されている方々が元々来ていて、新興住宅街とかも多いので。

— 震災前からそういうところがあったんですね。

**[鈴木]** そうですね。さらに今は新しい転入者の方たちがいないと、行政が立ち行かないっていうことはみんながわかっているので、そういう意味では、来てもらわないとしゃあんめい（しょうがない）みたいな感覚の人が大半ですね。

— おふたりは昔からここにいたわけではないのに、この辺りのこともすごく詳しいのはすごいなと思います。行政の方はお仕事上で接するかもしれないですけど、あと例えばどういう方に、どういう機会にお話を聞かれているんですか？

**[鈴木]** 地域の方たちに会ったらその人のおうちにお伺いするのは普段からです。cotohanaの仕事を専従でやる前は、富岡町の復興支援員をやっていて、地域の方たちに関わることも多かったのですが、地域の方たちを訪ねて歩くのは仕事でもしてきました。でも、プライベートのほうが多いかもしれないですね。そういう中でみなさんに震災前の富岡町のこともお聞きしてきましたし、今も日常的な会話の中で、町の変化とかがあったら教えていただいています。今日も、こどもを園に送ったあとに2軒くらい知り合いの家を訪ねて、元気にして

る？みたいな話をしてきました。

ー 本当にふらっと立ち寄る感じですか？

**【鈴木】** そうですね、一日一軒は行くかもしれないです。

**【小林】** 私は元々cotohanaの前に、浪江町に引っ越してからナミトモという地域で楽しく暮らそうっていう任意団体を立ち上げていて、その団体で、地域にどんな人がいるのかとか、ここで暮らすんだったら楽しく暮らしたいよねという人達と一緒に交流イベントをやっています。そういうことをしていく中で、地域の人や行政が考えていること、昔はこういう地域だったみたいなことをたくさん教えていただきました。その関係は今もずっと続いていて、その団体もまだやっています。cotohanaの活動にもナミトモの活動にも地域の方の話というのは不可欠なので、ライフワークのような形で一週間に2軒くらい、話を聞きに行っています。また、地域でいろいろ活動していると、話聞かせてくださいとか、相談乗ってほしいですというのも増えてきたので、そういう話の中から今の地域のニーズを知ることもあります。最近、自分で聞きに行くよりそっちの方が多いかもしいかなと思います。

**【鈴木】** 元にあるのはやはり、昔の体験かなと思います。自分は地域の人に育ててもらったなという幼少期の感覚がすごく強いです。私はシングルマザーということもあり、子どもたちに関わってくれる人を一人でも増やしたいという気持ちはけっこう強くあって、できるだけ地域に出て行くようにしています。それがcotohanaを通して、ほかの子どもたちにもひろがっていったらいいなという想いもあるので、地域の人達の協力は不可欠で、楽しみも含めて、お会いしています。

### あそびについてこれからのこと

ー 子どもたちが地域であそんでいる姿を見たいという想いが、おふたりとも強いと思うんですけど、現在の実際の状況と、大熊町や双葉町が帰還解除する先を見据えて、これからは子どもたちやあそびがどんな風になっていきたい、どういう展望を持たれていますか？

**【鈴木】** あそびでいうと、愚直に地域の中であそぶ姿を見たいというところです。しかし、なかなかすぐには実現しなさそうだとこのころで、いま3つのアプローチをしています。まずは冒険ひろばを続けていく、そのための人を育てて、人材の確保をしていく、財源の確保をしていくということがひとつ。ふたつめは、そこに集まってくださっている方たちを中心に、当事者のグループができていくということに対して働きかけをしていきたい。みっつめには、地域の中で学校や子どもに関わる地域団体さんがいるので、そういう方たちに働きかけて、子どもたちが今、地域の中であそんでいない、歩いていないっておかしいよという話から課題意識の共有をして、あそんでいる姿を見れたらいいよねっていうこと、ビジョンを共有して、ほかの団体さんにも子どもたちにアプローチしていくような取り組みを一緒に行ってもらったり独自に進めてもらったりということをやっていく。こういった形で、3方向くらいの道筋を持って、地道にやっていきたいと思っています。

**【小林】** ほかの場所だと、今の時期だったら海や川であそぶとかあると思うんですけど、な

かなかそういう場所も郡内では少なく、海水浴場もやっと一か所だけ、今年から檜葉町で再開しました。この地域には本当に自然な場所がたくさんあるけれども、いまそこがあそべないとか立ち入れないということがあるので、その変化は個人的にはずっと見ていきたい、働きかけていきたいなと思っています。浪江町は川に挟まれている町で、そういう身近な自然の中であそぶ機会はこれまでは普通だったから、それを再開していくってところは必要だなと思っていて、働きかけていきたいなというのは思いますね。

— その川では、震災前はあそんでいたんですか？

[小林] あそんでいたところですね。請戸川と高瀬川という2つの川で、鮭が戻ってきたからみんなで釣ってあそぶとか、川の中どんどん入っていくとか、海もそうですね。そういう場所だったってみなさんおっしゃっているし、それを今使えないっていうのがどうしてもしこりがあるみたいなので、復活させていきたいなと思います。民間でなんとかできる話じゃないのでちょっとハードル高いですが。

— いま入れないのは、県や市町村が立ち入りを禁じているという話ですか？

[小林] まず川に入っていくところの草が刈られていない、そもそも遊歩道がつぶれているという環境的な要因や、川の魚はまだ線量が高いので釣るのはNGですよという話もあります。あとは、原発の近くに海水浴場があったんですけど、そこも今は入らないようにしてくださいって言われています。なので、町は再開したけれどそもそもそういう環境が遠いまま。私は規制がないならどどんばしゃばしゃ入っていききたいタイプなんですけど、そう思う人もだんだん減ってきているんじゃないかなと思います。感覚的に遠くなっちゃったので。なので興味や関心がもう少し向いてくれたらいいな、という気持ちもあります。

— こどもたちに関する話でも、昔からあったあそび場だけど、今のこどもにとっては初めての場所、という話がありましたが、あそびの文化みたいなのがもう消え去っているような状態でしょうか。

[小林] 途切れそうですね。

— そこには大人の働きかけなしにはまず戻ってこないですね。浪江町で育った方たちの中に、小林さんみたいな思いの人がほかにいらっしゃいますか？

[小林] いないことはないんですよね。みんな内に秘めていて、出す場所がないっていう感じなんです。あと、土日もみなさん忙しそうそうですね。親御さんもこどもも、とにかく予定がいっぱい入っていて隙間がない。そんな感じが多いような気がします。でもみなさん内に秘めている感じはあるんですけど、なかなかそれを共有できていないというのはありますね。

— この4人の方のような、こういうことやりたいとか、だれかとつながっていききたいとか、そういう方ってけっこう来ているんですか？

[鈴木] 地域によりますね。少ないとは思いますが。そういう中でも、こどものためについていこうと、親御さんたちが場に出てきてくれることはすごくあるなと感じています。

[小林] こどもに対するプレーヤーの数は、双葉郡内はまだまだ少ないというのはすごく実

感していますが、鈴木さんも言ったように、こどもたちと一緒に、とか、こどもための機会づくりとなった途端、大人たちが躍起になって取組み始めることが今増えてきている感じがするので、その人たちとつながることはすごく重要だなと思っています。

一 鈴木さんと小林さんの突き抜けるような、こわいものなしと言ったら語弊があるかもしれないですけど。この人たちがここにいてくれるっていうのが希望だなんて思ったので、ぜひとも何で応援できるかわからないですけど、応援させてほしいなと思いました。

[鈴木] 応援してください。

[小林] ありがとうございます。

◎いわき・双葉の子育て応援コミュニティ cotohana さんにお話を伺って  
酒井真由子

指定の待ち合わせ場所である福島県双葉郡富岡町に車で向かう道中、「帰宅困難区域のため通行止め」という看板、積み重なった除染による土壌が入っていると思われる黒い袋、人が住んでいない民家、草木の茂みといったこれまで見たこともない光景に、震災はまだ終わっていないことを思い知らされました。そして、これからこの地はどうなっていくのだろうという不安を抱きながら、cotohana さんに伺いました。そんな私の気持ちとは裏腹に、鈴木さん、小林さん、日野さん、横山さんは、真夏の空に向かってすくっと立っている大きなひまわりのように、明るくそして優しく私たちを迎えてくださいました。

鈴木さんと小林さんは cotohana として活動していますが、ご自身のお子さんと共にこの地で暮らす当事者でもあります。cotohana さんの活動は、ご自身の当事者としての思いや困りごとを発端としつつも、自分たちの考えに留まることなく、子育て世帯の方が集まって困りごとや必要な情報を出し合う機会を作ったり、行政の方から情報や意見を聞いたり、震災以前からその地で暮らす方の家に出向いて震災以前の様子を聞いたりするなど、年齢も立場も多様な人と直接会って話を聞いて、課題や活動内容を探っていました。鈴木さんが「今日も朝、娘をこども園に送ったあとに2軒くらい知り合いの家を訪ねて、元気にしてる？みたいな話をしてきました」と話してくれましたが、他者に会いに行くことが、ご飯を食べるのと同じくらい生活の一部になっているようで、頭が下がる思いでした。以前は別の地で暮らしていた鈴木さんと小林さんは、現在、ご自身が暮らす地域を自分の足で歩いて訪ねるなかで、その地に暮らす住民になっていったのだと思います。だからこそ、本当の困りごとや本当に必要な情報・支援が的確にわかるのだと思いました。

また、鈴木さん、小林さん、日野さん、横山さんは cotohana でつながり合いつつ、同時に、ご自身が暮らす地域においてそれぞれ活動しておられました。それぞれの地域での活

動と4人の繋がりが、cotohanaさんの活動に厚みを持たせているように感じました。

震災後は、屋内あそび場が立てられていたり、遊具のある公園を除染したりして、子どもの遊び場が増えていったそうです。その中で、鈴木さんと小林さんは、ご自身の幼少期の体験から「屋内あそび場や遊具でしか遊べない子どもになってしまうのではないか」という課題を持ち、「公園や遊び場でなくても、子どもが関心を持ったり楽しいと思えたりして遊べるようになってほしい」という思いから冒険ひろばを作ったとのこと。双葉郡に限らず、私たちが暮らす地域でも、子どもの遊び場のほとんどは、大人が道具や遊具を設置した公園などですし、そういう場で子どもが遊ぶことに疑問を抱かない大人は多いと思います。鈴木さんの言葉「こどもたち自身が身の回りのものに興味や関心を持ってあそび始めるという力を取り戻してもらえたらなという思いを持って活動しています」は、私たち子どもに関わる大人は肝に銘じるべきだと思いました。

自転車で通学する一人の中学生が現われたことで、朝の景色が変わったという話は、とても印象に残りました。一台の自転車と一人の中学生が朝の景色を変える、それも、人々の心に感動を与える景色になるのです。

cotohanaさんの取り組みは、子どもや保護者の心に残る景色に柔らかい光を与えているような気がします。

聞き手 京井麻由

まとめ 酒井真由子

編集 清水冬音